

令和4年度
興南高等学校
入学試験問題

中期

国語

令和4年2月11日（金）実施 50分／100点満点

受験上の注意

1. 試験開始の合図があるまで、この問題用紙は開かないようにして下さい。
解答用紙は別になっています。
2. 問題は【一】～【三】まで3題あります。
3. 試験時間は50分です。
4. 解答は解答用紙の所定のところに記入して下さい。
5. 解答は楷書で丁寧に記入して下さい。
6. 解答用紙には、受験番号、中学校名、氏名を必ず記入して下さい。
7. 試験終了後、問題用紙は持ち帰って下さい。

【一】次の文章は斎藤孝著「語彙の森を育てる教育」の一部であり、《資料》文化庁「国語に関する世論調査」である。それぞれを読み、後の各問いに答えよ。文章には設問の都合で形式段落番号がついている。また、答えは解答用紙に楷書で丁寧に記入せよ。なお、指示された表記方法以外で解答した場合は採点されないため注意せよ。

① 大学の授業で学生が話すのを聞いてみると、どれくらい語彙があるのか、また今までにどのくらい本を読んできたのが、瞬時にわかります。若い人がよく使う「ヤバイ」という言葉は、よい意味にも悪い意味にも使えて便利ですが、それだけ意味があいまいで、細かい差異を表現しきれません。それに対して、語彙の量が多い人は、あらゆる場面や文脈に応じて、的確な表現を選んで使うことができます。8色で描かれた絵画よりも、200色で描かれた絵画のほうがアザやかなのと同じで、手持ちの語彙が増えるほど、表現の幅が広がっていきます。

② こうした語彙力の有無は、その人のインプット量、知っている語句の総量によるものです。これは単なる暗記的な知識量の問題ではありません。インプットの量が多いということは、本はもちろん、映画やテレビなど、あらゆる媒体から語彙を取りこみ、自分で使えるものとして吸収しているということです。つまり人は、日々使う語句によって、それまでの読書量のみならず、自身の知的レベル、身につけてきた「教養」をも、自ら示してしまうのです。

③ 語彙力がないと教養を疑われ、対人関係でも損をします。第一、せっかく語彙数の多い日本語をボゴボゴにしているのに、言葉を知らないでいるのは非常にもったいないことです。そこで私は、日本語の語彙力を鍛えるために、二つの方法をおすすめしています。

④ 一つ目は、慣用句についての知識チェックです。(1)、慣用句を日常的に使える人は、「人口人口に」と聞けば「膾炙するかいしやする」「枚挙まいげに」と聞けば「暇いとまがない」という風に、すぐに続きが浮かぶと思います。慣用句のいわば「上の句」に「下の句」を継ぐことができるかは、自分の語彙レベルをはかるうえでのシビョウシビョウになります。

⑤ なぜ日本語を使いこなすうえで慣用句が重要かという点、これは漢文の書き下し文的表現が基盤にあるからです。歴史的に見れば、

ば、漢文は日本語の「骨格」といってもよいものです。日本語の書き言葉も、元は漢文の書き下し文風に書かれていましたし、明治時代の寺子屋などでも、孔子や孟子の素読^②を行うのが当たり前でした。骨格があつて肉がつくわけなので、やはり日本人としては、伝統的な漢熟語を踏まえた表現を、多く身につけてほしいところです。

〔6〕（2）、語彙力を鍛える二つ目の方法は、名作の音読です。音読はリズムによつて、言葉を文脈ごと身体に染み込ませることができ、最良のトレーニング方法です。先ほどの明治期の素読教育について触れましたが、彼らは今でいう小学校一年生くらいから、『論語』を音読していました。その中で自然と漢文の素養が培われ、現代の大人を上回るほどの語彙を、早い段階から身につけていたわけです。

〔7〕現代の学生に特におすすめなのは、夏目漱石の作品を音読することです。かつて小学校一年生とともに、6時間かけて『坊っちゃん』を一気に音読するという授業を行ったことがあります。当然初めはツ^fま^fつて、うまく音読できないのですが、次第に私の手助けがなくても、すらすらと読めるようになっていきます。小学校一年生は、漱石のリズムになじんできたのです。そして6時間かけてついに全編を読み終えた時には、疲れているはずの生徒たちから拍手喝采^{かつさい}が起りました。感想を聞くと、子どもたちが口々に「頗るおもしろかった!」^{*2}と^{*1}言うのです。（3）、子どもたちが音読を通して、漱石のよく使う「頗る」という語彙を自分のものにしてしまったのです。

〔8〕このように、「書く」学習と違って「読む」学習は、振り仮名と教師のサポートさえあれば、早いうちからでも高度なものへのチャレンジが可能です。そして語彙を教わるには、漱石のような日本語の達人から教わるのが、最も有効なのです。

【 齋藤 孝 「語彙の森を育てる教育」『国語教育第114号』大修館書店 問題作成の都合上、一部改変 】

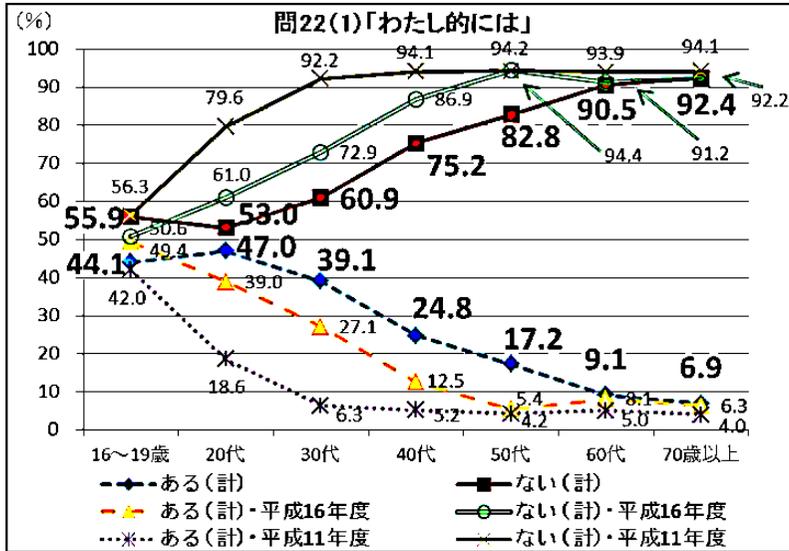
【語注】

*1 人口に膾炙する…多くの人の話題になり、世間に認められること。詩文等がほめられ、もてはやされること。

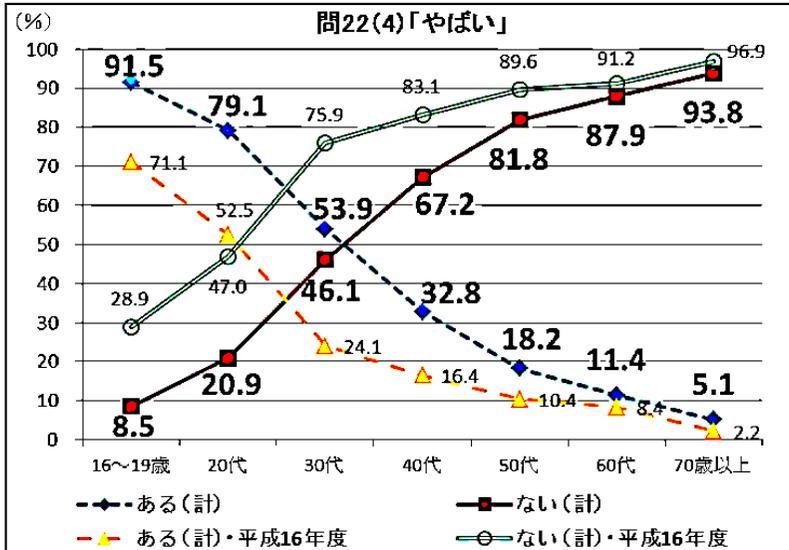
*2 頗る…たいそう、大いに。

1 言い方の使用頻度・「わたし的には」という言い方を使うことがあるか

〔年齢別・過去の調査との比較〕



2 言い方の使用頻度・「とてもすばらしい」という意味で「やばい」を使うことがあるか



問一 二重傍線部 a～f のカタカナは漢字に、漢字はひらがなに直して答えよ。

a 絵画のほうがアザやか b あらゆる媒体 c 日本語をボゴにしている d シヒョウになります

e 孔子や孟子の素読を行う f 初めはツまって

問二 波線部「はかる」と同じ漢字で表すものを次のア～エから一つ選び、記号で答えよ。

ア 土地の面積をはかる イ 国外逃亡をはかる ウ 計画実行の機会をはかる エ 問題の解決をはかる

問三 (1) ～ (3) に入る適当な接続詞を次のア～オから一つずつ選び、それぞれ記号で答えよ。

ア つまり イ しかし ウ 例えば エ そして オ だから

問四 傍線部①「大学の授業でく瞬時にわかります」と筆者が述べるのはなぜか。その理由となる一文を文章中から抜き出し、最初と最後の五字で答えよ。(句読点も含む)

問五 傍線部②「伝統的な漢熟語を踏まえた表現」について、漢熟語が正しく用いられている文を次のア～エから一つ選び、記号で答えよ。

ア 那覇市の調査では、今月の水道料金がまだ未納の人が多くことがわかっています。

イ 我が家は部屋が四つあり、南側のこの部屋はもっぱら兄が専有しています。

ウ 今回のあなたの要望は、市民の賛同を得ることが難しいので承服いたします。

エ 生徒会長選挙に立候補した彼の学校の未来を語った演説に感服しました。

問六 傍線部③「漱石のような日本語の達人から教わるのが最も有効なのです」の本文の結論について、生徒が国語の授業で《資料》を参考に理由をまとめることになった。筆者の考えを正しく踏まえている生徒の発言を選び、A～Eの記号のみで答えよ。

生徒A 筆者は形式段落①で指摘している通り、日本語の乱れについて危惧きぐしているよね。《資料》2にもあるけど、学校でも「ヤバイ」という言葉は日常的に使われるし、私たち10代は正しい日本語が身に付いていないということだよ。だから筆者は漱石の時代の正しい日本語を十分に学習してほしいと考えているんじゃないかな。

生徒B 筆者は、形式段落①・②で大学生の低学力化を憂えているよね。高校までにもっと語彙力をつけるために、現在よりも難しい語彙が使われている漱石作品を学習に取り入れることがその解決につながると思っているのではないかな。

生徒C 筆者は、日本語の特性について述べているよね《資料》1、2をみてもわかるけど、時代を経るごとに次々と言葉の使われ方が変化していくということは、言葉本来の意味がどんどん失われていっていると言えるよね。漱石の作品を読み、言葉本来の意味を取り戻すことが大切だと訴えているんだと思うよ。

生徒D 筆者は形式段落⑤で漢文が日本語の骨格であると述べていたよ。漱石は明治期の作家だから、文章が漢文体になるんじゃないかな。漢文の素養を身につけるためにも漱石の作品が有効であるということを伝えたいんじゃないかな。

生徒E 筆者は形式段落⑥で音読の効果について述べていたよ。漱石の文章に使われている語彙を知らなかったとしても、音読しているうちに身につけてしまうってすごいよね。筆者が述べる「日本語の達人」とは語彙量の豊富さを示すから、漱石の作品を読むことが語彙量を増やすことになるってことだよ。

問七 《資料》1・2から読み取れることについて、**適当でないもの**を次のア～オから一つ選び、記号で答えよ。

ア 《資料》1の今回調査の結果を年齢別に見ると、「わたし的には」という言い方をするのが「ある」と回答した割合は、20代が最も高くなっている。

イ 《資料》1で過去の調査結果と比較すると、年々どの年代においても「ある」と回答する割合が高くなっている。

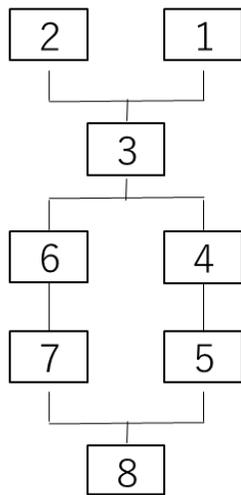
ウ 《資料》 1、2ともに70歳以上では過去の調査においても、「使うことがある」と回答した割合は少なく、新しい表現には興味がないことが読み取れる。

エ 《資料》 2を過去の調査結果と比較すると、「とてもすばらしい」という意味で「やばい」という言い方をすることが「ある」の割合が「ない」の割合を上回っていたのは、平成16年度調査では20代以下であったが、今回調査では30代以下となっている。

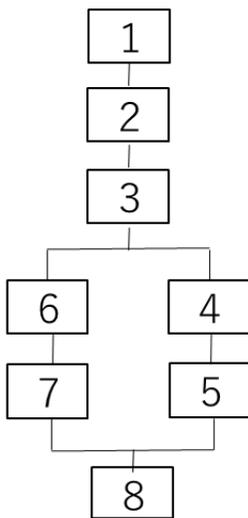
オ 《資料》 2を年代別に見ると、「とてもすばらしい」という意味で「やばい」という言い方をすることが「ある」と回答した割合は、年代が低いほど高くなる傾向があり、16～19歳が最も高く、次いで20代となっている。

問八 本文の段落構成として最も適当なものを次のア～エから選び、記号で答えよ。

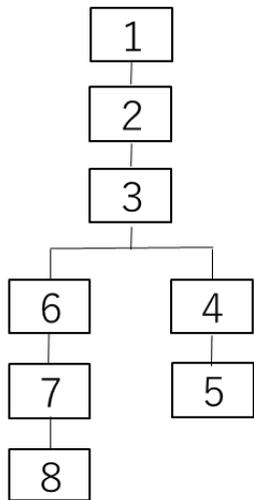
ア



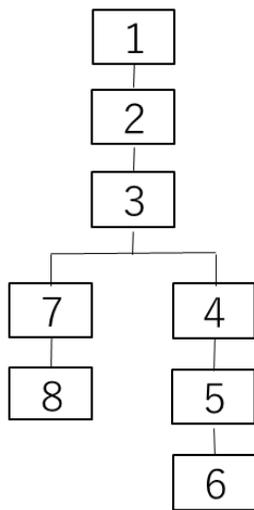
イ



ウ



エ



【二】次の文章を読み、後の各問いに答えよ。また、答えは解答用紙に楷書で丁寧^{こうご}に記入せよ。なお、指示された表記方法以外で解答した場合は採点されないため注意せよ。

高校生の航太、和彦、京、河野は俳句甲子園（毎年、愛媛県で行われる高校生向けの俳句大会。五人一組で俳句についてディベートを行い、勝敗を決める。）に出場するために、部員を探すことになった。航太は、友人の村上恵一が、古い写真の裏に自作の俳句を書いていたのを見つけ、俳句甲子園の出場メンバーに勧誘する。航太は、恵一と、句の作者である恵一自身も思いつかないような解釈を航太と他の部員の三人が提示し、その解釈に恵一自身が納得できたなら俳句甲子園に出場してもらうという約束をとりつけた。次は、その約束のために、航太ほか三人が恵一の〈手放せる鮎^{あゆ}「母」は「舟」に似ている〉という句の解釈をし、恵一に納得させようとしている場面である。

航太は三人のチームメイトが待つ部室に、恵一を引っ張っていった。

とにかく、恵一の考えてもいなかった情景を読み取ってみせる。俳句とはそういうものだから。

恵一と机を挟んですわった四人の顔は緊張しているが、その度合いには差がある。一番緊張^Aの色の薄い和彦が、口を開いた。

「なんか……、こわい雰囲気ですね。じゃあ、ぼくから始めていいですか？　こういうのは早く終わらせたほうが楽なんで」

そして、気軽な調子で話し始めた。

「ぼくが注目したのは、『母』と『舟』についているカギかっこです。これは、この二つの言葉を漢字として強調するために使っているんだと思いました。そうして、改めてこの二文字に注目してみると、たしかにデザイン的に似ていますよね。『母』の二画目を曲げずに左へ払い、上にちよんと一画足したら、『母』の字は『舟』になる。漢和辞典で見たら二つの漢字の成り立ちは全然別のものですけど、『母』は『舟』に似ているっていうのは、面白い発見だと思いました。それから、よく、『海』という字の中には

『母』がいるなんて言いますよね。海はすべての命の源、それは命を産み出す母にも通じる。そんなことを考えさせられて面白かったです、この句」

さすが、和彦は理屈っぽいけど、うまくまとめている。

「それで、この句の解釈ですが、『母』の中には命がある、『舟』も何かの容れ物みたいに思えてくる。だから、句全体が命の源の水を連想させる。そういうイメージが面白かったです」

和彦が口をつぐんで、窺うように恵一を見る。今度は恵一が口を開いた。

「字形のことは、もちろん最初から考慮済みだよ。それから、『舟』にはもともと容れ物という意味がある、水の上をいく乗り物というだけではなくて」

「え、そうなんですか？」

「ほら、浴槽のことを湯舟とか言うだろ」

「あ……」

和彦がそこで言葉に詰まる。つまり和彦の解釈はもともと恵一の中にあつたものというわけか。

次に京が発言を始めた。

「私は、この句を読んで、昔、海の中で足がつつた時のことを思い出しました。水の中でもがきながら舟を見上げると、濡れた船べりはずごく頼もしくて。あそこにながれば助かるんだって夢中で手を伸ばすのに、ぬるぬるしていつかめない。大人が気づいて引っ張り上げてくれて、ようやく舟に上がった時の、心からの安心感。水の中では生きられない私たちを守ってくれる舟、それと『般的な母との類似性』は、ああ本当にあるかもって納得しました」

恵一は無言で聞いているだけだ。

続いて河野が話し始める。

「私は『手放せる』という言葉から、鮎の放流を思い浮かべた。鮎がいる生態系を守るために、鮎の卵を育てて稚魚にして、川に放す。そういう活動があるよね」

その言葉を聞いた時だ。航太の頭の中に、ぱっと新しい解釈が浮かんだ。だが、河野はまだ話し続けている。

「手放されるからこそ、生きていける鮎。つかまえた鮎を手放すことの意味は一つじゃないんじゃないかな。手放してしまった、残念、それだけじゃなくて。そして鮎の生命力は、産み出す『母』、命の豊かさにもつながると思う」

恵一は一瞬考え込んだが、すぐにこう反論してきた。

「そうかもしれない。でも釣りにしろ放流にしろ、結局人間が勝手にやっていることだろう。鮎に絶滅してほしくないから、自分たちの食料としての鮎を守るために、放流する。それと命の豊かさを結びつけるのは、人間の身勝手じゃないのか」

「身勝手で何がいけないの」

河野が体を乗り出した。「結果的に鮎が増えるなら、人間の思惑なんて二の次でいいじゃない」

恵一が勢いに押されたように黙る。河野はさらに勢いづく。

「それにね、この字、『舟』っていうのは、『船』よりも小型のものに使う字でしょ。それと『母』が似ているっていうのは新鮮で、でも納得がいった。あと、人間は水の上では舟を頼りにするけど、でも、その舟も実は結構ぐらぐらしたり、危なっかしかったりする。それが私の解釈の、『稚魚』にもびつたりのイメージだと思った」

恵一が口を開く。

「たしかにそういうイメージで『舟』の字を使ったんだよ。危なっかしいもの、頼りになると思っていると足元をぐらっと揺さぶられるようなものの象徴として。それと『母』も似ているっていうのがおれの書きたかったことなんだろう。結局、^②今の解釈は意外で

もなんでもない」

航太は落ち着かなくなつた。あの、気が弱くて優しい恵一のお母さんのことを恵一が危なっかしいと語るのを聞くのは、初めてだ。それから恵一は京をちらりと見やつた。

「海の中にいると舟はすぐく頼りになるように思える。というか、他に何もすがりつくものがないんだもんな。なのに、舟に上ると今度はその舟底はとても薄っぺらくて、ぐらぐら揺れる。乗っていけば船酔いもする。ちっとも安心できるものじゃない。だからと言って、ほかに頼れるものもない。海は大きすぎるからな」

河野が手を打った。

「ああ、その感じが、まさしく母なのね。頼りないのか頼れるのか。舟も母も本質が変わつたわけじゃないのに、そのイメージは様々に変わるんだ。でもイメージが変わるのって、迷つて揺れているのは、自分も同じだからじゃないの？」

恵一が初めて虚を衝かれたような顔になつた。河野の勢いは止まらない。

「心の奥ではわかっているんだよね。海まかせ、自然まかせになるしかない自分、頼りないとわかっているものにも頼りたくなる自分、本当はそういう自分に一番いらだっているんだって」

そこで河野は航太に目で合図を送つてきた。河野の主張は終わったようだ。

航太はゆっくりと口を開いた。答^④えが見つけかけたとような気がしていた。

恵一はさつき、「海」と言った。

自分では鮎を釣りに行った時のネガティブな記憶を処理するための句だと思つているが、その根底にあるのは、海が苦手だから舟も苦手で、漁師であるお父さんと仲良くなれない恵一の気持ちなのだ。きつと。

川や鮎が問題なんじゃない。

そして、^{*1}ばあちゃんから聞いたこと……。

「あのさ……。おれはほかの三人と違って、この句が書いてある写真を見ちゃったわけだけど……。それで、感じたことじゃなくてたまたま知っちゃったことなただけだ」

そこで一度言葉を切って、言いたいことをまとめる。

「写真の日付は五月になっていた。五月なら、^{*2}鮎は禁漁期だ」

恵一が目を丸くした。

「鮎は時期も漁法も厳しく制限されている。だから、恵一が獲った鮎は、禁漁期に川で舟遊びをしていて、たまたま舟から下ろした釣り針に引っかかっちゃったものとかじゃないか？ だからお父さんは、ルールを守る漁師として、問答無用で川に放したんじゃないか？ 別に恵一に意地悪したわけじゃなくて」

恵一の顔に納得の色が広がっていくのに力を得て、航太はなおも続けた。

「それとさ、細かいことだけど、^⑤てにをはの**選**び方にもずっとこだわっていた」

「母」は「舟」に似ている。

「母」と「舟」は似ている、のではなく。

「舟」は「母」に似ている、のでもなく。

「作者、つまり恵一にとって真っ先に『母』が関心の中心に来たんだよな？ その関心の向こうに『舟』があった。ああ、このしがみついている『母』は『舟』に似ている、と。おれには、字形が似ているっていうのは後づけの理屈で、たまたまそういう偶然の類似に気がついて面白くなった……っていう俳句に思えた。だからどうって、うまく言えないけど、とにかくすぐにしがみつけるお母さんがいるっていいなって、それが感想。たとえ舟と同じで頼りないところがあるお母さんでも」

くそ、結局小学生みたいな感想になってしまった。鮎をキャッチアンドリリースした理由を指摘できたのだって、たまたまばあちゃんが禁漁期について教えてくれたからだし。そこで京がふつと笑った。

「私もうらやましいですよ。たとえ頼りない気がするとしても、それは、頼ろうとした経験がある人でないと思いつかない感想です。私は一度も、自分の母を頼ろうと思ったことがないですから」

……母を亡くした航太よりもさらに深刻な口調に聞こえたので、何も言うことができなくなってしまった。
京もそれに気づいたようだ。

「あ、すみません、重い話をしちゃいました？ 気にしないでください」

河野が気を取り直して、恵一に向かい合う。

「村上、どう？ 私たち四人それぞれの鑑賞を試してみた。すべて、あんたの想定内だった？」

一瞬言葉に詰まった恵一だったが、すぐに、根負けしたように笑った。

「…いいや。まず、鮎を放すことにいろんな肯定の意味をつけてもらったのは、予想外だったよ」

そして、ちよつとすわり直した。

【森谷明子 『南風吹く』（光文社）より抜粋 ※問題作成の都合上、一部改変】

【語注】

*1 ばあちゃんから聞いたこと…航太は過去にばあちゃんから禁漁期について聞いたことがある。

*2 禁漁期…資源保護の目的で水産動植物の捕獲や採集が禁止される期間。

*3 キャッチアンドリリース…釣り人が、釣った魚をすぐ水中に戻すこと。

問一 二重傍線部 A・B の本文中における意味として最も適当なものを次のア～エから選び、それぞれ記号で答えよ。

A 緊張の色の薄い

ア 緊張による顔の赤らみが見られない イ 少し緊張し始めたことがうかがえる

ウ あまり緊張していないように見える エ 緊張している様子が全く見られない

B 目を丸くした

ア 興味が湧いて目を見開いた イ よく見るために目を見開いた

ウ 怒りで目を大きく見開いた エ 驚いて目を大きく見開いた

問二 傍線部①「一般的な母との類似性」とあるが、この箇所における「一般的な母」の像として最も適当なものを次のア～エから

選び、記号で答えよ。

ア わが子に不安を抱かせず、様々な危険から守る母。

イ 放っておくと危険なわが子の命を強引にでも救う母。

ウ わが子をいつでも助けられるように常に見守る母。

エ 自らの危険をかえりみず、わが子に手を差し伸べる母。

問三 傍線部②「今の解釈」とあるが、その説明として最も適当なものを次のア～エから選び、記号で答えよ。

ア 頼りになるはずの舟には転覆のおそれがあり、それが人の手によって滅ぶ稚魚のイメージにも適するという解釈。

イ ぐらぐらと揺れうごく舟は不安定であり、それが優しい反面気弱である恵一の母のイメージにも適するという解釈。

ウ 頼りになるはずの舟は案外危なっかしく、生態系を守るために放流される稚魚のイメージにも適するという解釈。

エ 舟を頼りにすると必ず危険にさらされ、それがいざという時に頼りにならない母のイメージにも適するという解釈。

問四 傍線部③「初めて虚を衝かれたような顔」とあるが、この時の恵一的心情として、最も適当なものを次のア～エから選び、記号で答えよ。

- ア 河野の考えに不意に納得してしまい悔しく思う心情。 イ 河野の意見を否定しなければならぬと焦る心情。
ウ 河野の勢いに押されて弱気になってしまう心情。 エ 河野からの思いもよらなかつた指摘に驚く心情。

問五 傍線部④「答えが見つかりかけたような気がしていた」とあるが、次はこれに関わる航太の解釈を説明したものである。(A)～(C)に当てはまるものを次の条件に従い、本文中から抜き出して答えよ。Aには四字を、Bには登場人物の名前を抜き出し、Cは十五字以内で当てはまる内容を記述せよ。

河野の (A) についての発言から浮かんだ解釈に対して、恵一が (B) の発言をきっかけに述べた「海」についての発言がヒントになった。そこから、恵一にとっては川や鮎が問題ではなく、海や舟が苦手だから (C) という気持ちの問題であるという解釈にまとまりかけた。

問六 傍線部⑤「てにをはの選び方」について説明した次の文章の (a)～(c) に当てはまる語句を、字数条件に注意して本文中から抜き出して答えよ。

『舟』は『母』と似ている」の場合は (a)＝一字 () が関心の中心である。『母』と『舟』は似ている」の場合は (b)＝七字 () 点が注目されている。『母』は『舟』に似ている」の場合は (c)＝一字 () が関心の中心になっている。

問七 次の【資料Ⅰ】は辞書の「舟」の項目、【資料Ⅱ】は俳句甲子園全国大会における最優秀賞句とその句の鑑賞文である。これを読み、後の（問い）に答えよ。

【資料Ⅰ】 辞書の「舟」の項目

舟 六画

- 意味 ① ふね。ア・水上を進む乗り物。 イ・液体を入れるおけ。「湯舟」
- ② 周りを取り巻く。めぐらす。

●なりたち
ふねを描いた図形。ふねは frog (シウ) といい、この記号で再現させた。ふねには、板囲いするという構造から、周囲を取り巻くというイメージがある。また、その機能から、一方から他方へ渡すというイメージがある。

【 出典 『学研 学習用例漢和辞典 改訂第二版』（学研教育出版） ※問題作成の都合上、一部改変】

【資料Ⅱ】 俳句甲子園全国大会における最優秀賞句と鑑賞文

滴りや方舟に似てあなたの手 興南高校二年 桃原康平

〔鑑賞文〕

岩からポタポタしみ出る水（滴り）に差し出された「あなたの手」。方舟はこがねに似た「あなたの手」に、私をどこかへ連れて行ってくれるような期待の反面、不安も感じている。なぜなら、「あなた」とは私に一番近い私以外の人であり、じつは遠い彼方のことでもあるから。「方舟」とあるが、宗教的な物語を読者に要求してはいない。未来への期待と不安の拡がりに対し「滴り」は現実を刻む。その拡大と引き戻しが、静かだけど沈まない。（俳人・鶴田智哉ときたともや）

【 『第二十一回俳句甲子園公式作品集』（俳句甲子園実行委員会）※問題作成の都合上、一部改変】

(問い) 本文と【資料Ⅰ】・【資料Ⅱ】を読んだ生徒たちが、それらを題材に議論を交わした。本文と【資料Ⅰ】・【資料Ⅱ】の内容の理解として、適当でないものを次のア～エから一つ選び、記号で答えよ。

ア 生徒A―舟という字のなりたちには、舟の機能から、一方から他方へ渡すというイメージがあるみたい。興南高校も過去に俳句甲子園に参加して、全国大会で最優秀句を受賞したことがあったね。資料Ⅱに書いてある「滴りや方舟に似てあなたの手」がそれだった。

イ 生徒B―資料Ⅱの鑑賞文に「私をどこかへ連れて行ってくれるような期待」、「『あなた』とは私に一番近い私以外の人であり、じつは遠い彼方のことでもある」といった言葉があったけれど、その句は舟の機能から来るイメージと関わっていても読めるね。

ウ 生徒C―もう少し舟という字のなりたちに目を向けると、周囲を取り巻くというイメージもあるみたい。確かに私も周りに何かあると安心する。本文でも触れられていたけど、字の形以外にも、頼もしさや安心感という点でも舟と母は似通っているんだろうね。

エ 生徒D―でも、恵一は舟を安心できるものじゃないと捉えていたね。そうした舟の安心できない点を母に重ねていて、でも、頼りない母だと分かっていても頼ってしまう自分にもいらだっていた。そんな不安定な自分を重ね合わせることを意図して舟を詠んでいた。

【三】次の文章は「古今著聞集」の抜粋であり、琵琶湖で催された月見の宴の出来事を描いたものである。これを読み、後の各問に答えよ。また、答えは解答用紙に楷書で丁寧^{*}に記入せよ。なお、指示された表記方法以外で解答した場合は採点されないため注意せよ。

^{*}₁ 志賀僧正明尊、^{*}₂ もとより筆箒を憎む人なりけり。或る時、明月の夜、湖上に三船を浮かべて、管弦・和歌・^{*}₃ 頌物の人を乗せて宴遊しけるに、^{*}₄ 伶人等その舟に乗らんとする時は、「この僧正は筆箒憎み給ふ人なり。しかあれば用枝は乗るべからず。」^{*}₅ 事になりなんず」とて、乗せざりければ、用枝、「さらば打物をもこそ仕らめ」とて、しひて乗りてけり。

^a やうやう深更に及ぶほどに、用枝^b ひそかに筆箒を抜きだして、湖水に浸して潤しけり。人々見て「筆箒か」と問ひければ、「さ^②にはあらず。手洗ひなり」と答へて、何となき体にて居たり。しばらくありて、つひに音取^c いたりければ、かたへの楽人ども、

「^③さればこそいひつれ。よしなきものを乗せて、興さめなんず」と、色を失ひて嘆きあへるほどに、その曲^c めでたく妙にしてみたり。聞く人皆涙落ちぬ。年ごろこれをいとほるる僧正、人よりことに泣きていはれけるは、「^{*}₇ 正教に、筆箒は^{*}₈ 迦陵頻の声を学ぶといへることあり。この言を信ぜざりける、口惜しきことなり。」^④ 今こそ思ひ知り（^{*}₉）。今夜の纏頭は他の人に及ぶべからず。用枝一人にあるべし」とぞいはれける。このことを後々までいひだして、泣かれけるとぞ。

【語注】

* 1 志賀僧正明尊：志賀寺の僧正。「僧正」は、僧侶の官位で最高位にあたる。

* 2 箏篳：雅楽の管楽器。奈良時代に中国から伝来した縦笛の一種。音は強く、哀調を帯びる。また、後に登場する「用枝」は

箏篳の名手。

* 3 頌物：漢詩文。 * 4 伶人：楽人。演奏家。 * 5 事にがりなんぞ：きつと苦々しくなるう。

* 6 打物をく仕らめ：打楽器でも演奏致しましょう。 * 7 正教：仏の教え。

* 8 迦陵頻：上半身が人で下半身が鳥の仏教の想像上生物の名。極楽浄土にいるといわれ、顔は美女のようで、その声が非常に美しいところから、仏の声を形容するのに用いられる。

* 9 纏頭：歌舞・演芸などをした者に、褒美として衣服・金銭などを与えること。

問一 二重傍線部 a・b・c の本文中における意味として最も適当なものを次のア～エから選び、それぞれ記号で答えよ。

a 「やうやう」 ア ようやく イ だんだん ウ とうとう エ ますます

b 「ひそかに」 ア ゆっくりと イ こっそりと ウ 堂々と エ ひっそりと

c 「めでたく」 ア うやうやしくて イ 堂々として ウ 素晴らしくて エ 喜ばしくて

問二 傍線部①「用枝は乗るべからず」について、後の各問いに答えよ。

1 その理由を示した一文として最も適当な箇所を特定し、最初と最後の五字で答えよ。(句読点も含む)

2 このように言われた用枝はどのような行動にでたか。その行動として最も適当なものを次のア～エから選び、記号で答えよ。

ア 伶人らの言うことを無視して舟に乗りこんだ。 イ 伶人らに贈り物をして機嫌をとり舟にらせてもらった。

ウ 伶人らに依頼してどうか舟に乗せてもらった。 エ 伶人らの制止を上手くかわして何とか舟に乗りこんだ。

問三 傍線部②「さにはあらず」の「さ」は何を指すか、ひらがなで答えよ。

問四 傍線部③「さればこそ興さめなんぞ」について、後の各問いに答えよ。

1 「よしなきもの」とは、「とんでもないもの」の意である。ここでは何を指すか。本文中から抜き出して答えよ。

2 楽人たちは、どのような思いでこの発言をしているか。その説明として最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えよ。

ア 雅楽で実力不足の用枝が舟に乗ることに対し、初めから気に食わなかった楽人たちは宴が進んでも苛立ちが収まらず、この場を楽しめないことを残念に思っている。

イ 楽人たちは、用枝が箏を演奏することを止められていたにも関わらず勝手に演奏を始めようとしていることに、だんだんと怒りが増してきている。

ウ 楽人たちは箏の演奏に興味がなく、用枝が演奏を始めようとしていることに気づき、演奏を聞かなければならないことにうんざりしている。

エ 用枝が舟に乘ろうとしていた時から反対していた楽人たちは、用枝が箏を演奏することで宴の場がしらけてしまうことをひどく心配している。

オ 楽人たちは、用枝が箏を演奏するとは思っておらず、宴の場を台無しにしてしまうのではないかとおろおろしている。

問五 用枝の演奏を聞いた人々の様子として当てはまらないものを次のア～オから一つ選び、記号で答えよ

ア 用枝の演奏を聞いた人は、皆泣いていた。 イ 演奏を聞き、一番泣いていたのは僧正だった。

ウ 僧正は、用枝一人に褒美をあげることにした。 エ 演奏はまるで迦陵頻の声のような音色であった。

オ 僧正は用枝の演奏を今まで聞かなかったことを悔しがっていた。

問六 傍線部④「今こそ思ひ知り（ ）」の空欄には完了の助動詞「ぬ」が入る。文中に入るのに適切な形を次のア～カから選び、記号で答えよ。

ア な（未然形） イ に（連用形） ウ ぬ（終止形）

エ ぬる（連体形） オ ぬれ（已然形） カ ね（命令形）

問七 「古今著聞集」は何時代に書かれたものか。「時代」に続くように、漢字で答えよ。

問八 本文の主題として最も適当なものを次のア～エから選び、記号で答えよ。

- ア 自分の芸に誇りをもち、周囲に何と言われてもその道を貫くことが重要である。
- イ 音楽ほど人々の心を打つものではなく、一瞬で人の心をうごかす力を持っている。
- ウ 自分の先入観により好き嫌いを決めてしまうことは、後々後悔することになる。
- エ 楽器の演奏は場の雰囲気に合わせて、程よい頃合いで演奏を始めるのが最もよい。

※問題は以上。